

刑務所には二種類の人間がいる。馬鹿な奴と利口な奴だ。東京少年刑務所略して東京プリズン、二十一世紀初頭に少年犯罪の増加に頭を痛めた政府が砂漠のご真ん中に設立した世界に類をみない収容人数と規模の巨大刑務所。

台中戦争や第三次ベトナム戦争による難民の流入、韓国と北朝鮮の併合による半島の経済低迷で日本に新天地をもとめた流民たちが一気に押し寄せたために都市の治安は悪化し、かつての東京は無国籍スラム化した。そんな長つたらしい前置きはどうでもいいって奴もいるだろうが、まあ聞け。おれもなるべく手早く済ませる、前回までの説明は苦手なんだ。

自己紹介がまだだったな。俺の名前はロン、日本生まれの台中混血児で国籍はなし。半世紀前には日本にもちゃんと国籍法があつて、日本で生まれた子供なら両親が外人でもちゃんと日本国籍を与えられたらしいがそんなのは今じゃ眉唾のときばなし。

難民の増加にともない日本生まれの二世が増えるにしたがい政府は国籍法を改変した、増えつづける一方の二世や三世にまでいちいち国籍をあたえて社会保証してたんじゃ予算がばかにならないからだ。今じゃこの国で日本国籍を持つてるのは三代前までさかのぼれる生粋の日本人だけ、俺たち日本生まれの二世は完全にカウント外ってわけだ。

俺が生まれたのは豊島区池袋スラム。治安は都下最悪で斬った張ったは日常茶飯事の無法地帯、対立するチーム同士の抗争なんて珍しくもない。とくに仲が悪かったのは台湾派閥と中国派閥。無理もない、台湾と中国が戦争をしたのはまだたった15年前なのだ。チームの構成員の中には15年前の戦争で家族を失った奴も大勢いて、親の代からの根強い怨恨を受け継いで相手国を敵視している。池袋では殆ど毎日のように台湾系チームと中国系チームの小競り合いが起きていた。

俺がいたのは武闘派でならした台湾系チーム。

お袋とふたりで暮らしてたアパートを追んでて路頭に迷ってた11歳の頃から13歳までの二年間身を寄せていたが、居心地はお世辞にもよくなかった。決まってる。俺の親父は中国人だ。両親が台湾人と片親だけ台湾人のガキじゃ格がちがう、しかも父親は憎き中国人ときた。俺の中に家族を殺した中国人の面影を見てしつこく絡んでくる奴もいた、はつきり言つて肩身が狭かった、かなり。

だからあの時もムキになってしまったのだ。

『できるだろう』

『できるに決まってるだろ』

ガキっぽい応酬を苦々しく思い出す。まったく、安っぽい挑発になんか乗るんじゃないかった。にやにや笑いながら俺

の手に手榴弾を握らせたのは当時のチーム仲間、といって俺と四つしかちがわなくせに無駄に態度のでかいけすかないガキだ。まわりを取り囲んだやつらのにやにや笑いも癪に障る。

因縁の仇敵たる中国系チームとの決戦を控えた前夜。

『仲間の中国人を殺れるかどうかミモノだ』

アジトにしている廃工場に集合して明日の作戦を練っていた俺たちだが、いつのまにか会議の方向が脱線していた。

俺の覚悟を見極めるという名目で、俺が本当の台湾人かどうかたしかめるという大義名分で手にあずけられたのは米軍の横流し品の手榴弾。どこからかつばらつてきたのか知らないが、栓を抜くだけで人間を肉片に変えることができる物騒な代物だ。

『やるよ。持つてろ』

半ばおしつけるかたちで俺に手榴弾を握らせそいつが命じる。

無骨な形状の手榴弾をしげしげと見つめる。

飛び道具は卑怯に感じられ気乗りしない。

『いらねえ。鉄パイプでじゅうぶんだ』

無造作に手榴弾を突っ返しかけた俺だが、途端にやつ目の目が冷え込んだのに気付き「やばい」と舌打ちする。

『持つてて損するこたないだろ』

『米軍の落としもんが信用できるか、こんな手榴弾自爆用にしかつかえねえ』

『逃げるのか』

意味ありげに言葉を切り、車座になったガキどもの間に沈黙が浸透するのを待ち、続ける。

『中国人を殺るのに怖気づいたのか』

展開は読めていた。なにかにつけ因縁をふっかけてくるコイツのことだ、絶対に俺の出自にふれるとおもった。

『そんな危ねえじゃねえ。いつ爆発するかひやひやしながらこんな危ねえもん持ち歩くより鉄パイプで頭がち割ったほうが確実だつてだけだ』

『言い訳すんのが怪しいな』

目が笑ってる。

まわりのガキどももそうだ。窮地に立たされた俺を見て心の底からたのしげににたついている。

周囲のガキどもが嬉々として横槍を入れる。

『本当はおまえ、あっちのチームに入りたいんじゃないか』

『なにを、』

『べつに止めねえぜ、今からでもあっちのチームに乗り換えろよ。親父が中国人ならそれもアリだ、中国人の足裏なめて仲間にいれてもらつてこいよ』

ねちねちいたぶるような口調でイヤミを言われ頭が沸騰し

かけたが、拳を握り締めてこらえる。

『―やれるさ』

陰険なやり方に反発して、勢いだけで断言する。てのひらにすっぽりおさまる大きさの手榴弾をもう一度見下ろし、自分に言い聞かせるようにくりかえす。

『ひとり残らず殺つて証明してやるよ、俺が生粋の台湾人だつてことを』

物心ついたときから台湾人の母親と暮らしてきて箸の作法から廟詣でにいたるまで骨の髄まで台湾文化をたたきこまれてきたのに、顔も知らない親父が中国人だというただそれだけでこんな扱いを受けるいわれはねえ。いいさ、明日の抗争じや存分に戦果をあげてコイツらを見返してやる。手榴弾は保険だ、チームが全滅して俺ひとり生き残るかに追いつめられないかぎりは栓を抜くこともないだろう。

俺は馬鹿だった。

「そのまさか」の可能性をもう少し尊重するべきだったのだ。

いまさらなにを悔やんでも後の祭りだが、もしあの時手榴弾の譲渡を拒んでいれば俺は今こうしていなかっただろう。つまらない見栄をはってこれからさきの人生を台無しにし

てしまったばかりか、くそつたれた人殺しの前科を負ってしまったのだ。

刑務所には二種類の人間がいる。馬鹿な奴と利口な奴。

俺はまちがいなく前者だ。いや、刑務所送りにされる時点でみんなバカな奴にはちがいないが、利口な奴が看守に媚売つてとりいつて特別待遇を受けているのに比べて俺は損をしている。もつとも今じゃ開き直つてもいる。馬鹿なら馬鹿で結構、嫌いな人間に愛想笑いなんてしたくないからな。

さて、ながながと続けてきたが最終的になにが言いたいのかというところに尽きる。

刑務所には二種類の人間がいる。手紙がくる奴とこない奴だ。

+

「うつとうしい奴だなお前」

いまさらわかりきったことだが、レイジの沈んだ顔を見ると言わずにはいられない。頭を抱えてベッドに伏せたレイジがじつに情けない声をあげる。

「だってよーあんまりだよー本燃やしたの俺じゃねえのに  
こんな無体な仕打ち」

スランプに陥った作家のように頭をかきむしって苦悶する  
レイジを隣のベッドから嘲ってやる。

「そもそも図書館で借りた本を凶器にすんのがまちがいないだよ」

レイジの愛読書は聖書だ。原則として東京プリズン収監時  
における囚人の私物持ち込みは禁止されているから、レイ  
ジが暇潰しに読み耽っていた聖書は図書館から借りてきた  
ものでしかありえない。こつともあろうに借り物の聖書でサー  
シャ率いる北のガキどもをぶん殴って血に染めた男が当た  
り前の制裁措置として図書館への出入り禁止されたところ  
でさっぱり同情の念はわかない。自業自得だ。

「つめてえな」

白けた顔の俺を仰ぎ見て、ガキつぽく口をとがらすレイジ。  
どんなに美形でも拗ねた表情はガキつぽくなるもんだなど  
妙に感心する。レイジは普段から表情を崩してることが多  
いからいまいち美形の実感がわかないが娑婆にできれば女が  
放っておかない容姿をしている。

それが証拠に今でも大量のラブレターが届く。

「活字に飢えてんなら例のラブレターでも読み返せよ」

そつてなく顎をしゃくり、レイジが伏せつたベッドの下を

促す。ベッドの下をのぞきこんだレイジがなげかわしげに  
ため息をつく。

「全部暗記しちゃったよ、もう」

「うそつけ」

「本当だよ。今ここで暗唱してやろうか」

「いらねえ」

「はーん。嫉妬か」

「死ね」

なんで俺がうきうきしながらラブレターを音読するレイジ  
に嫉妬しなければならぬ？ たしかに俺にはレイジみた  
いに両の腕からあふれんばかりのラブレターなんて届いた  
試しがないし、というかそもそも東京プリズンにきてから  
手紙をもらったことがない。いや、東京プリズンにきてか  
らとか限定しなくても、スラムで喧嘩に明け暮れていたこ  
ろまでさかのぼってもだれかから手紙を貰ったことなんて  
一度もない。それがなんだ？ 女から手紙をもらったこと  
がないのがそんなに恥ずかしいことなのかよ。

「女から手紙もらうのがそんなにえらいことなのかよ。娑  
婆にいた頃のお前がどれだけモテまくって女を泣かせてた  
かしらねえけど調子にのんな」

「なに勘違いしてんだ、逆だよ逆」

要領を得ないやりとりで不審顔をする。ベッドに上体を起

こしたレイジがいつのまにかとりだした手紙で顔を仰ぎながら笑う。

「この手紙を書いた女たちにやきもち焼いてるんだろ、口ン」

は？

「なんで俺がやきもち焼くんだよ」

「俺のガールフレンドだからさ」

「意味わかんねえ、付き合ってるか」

レイジに愛想を尽かし、壁の方を向いてごろりと横になった俺は背中であつた調子つばずれの鼻歌を聞く。

「いいぜ手紙は。愛がこもってる」

背後でカサカサと紙の擦れる音がする。黄ばんだ手紙を広げてうきうきしながら文面を読み始めたレイジの顔が目に見えかぶようだ。腹が立つ。どうせ俺には手紙がきたことなんて一度もねえよ、と心の中で吐き捨てて目を瞑る。

俺だって天涯孤独ってわけじゃない、娑婆には11の時から音信普通のお袋がある。お袋は自分が腹を痛めて産んだガキが刑務所に入っていることを知ってるんだろ。風の便りに小耳に挟んでも不思議じゃないが、だからといってあの薄情な女に期待するのがまちがってる。刑務所暮らしの息子を案じて手紙をしたためるような人並みの親心があの女にあるわけがない、十一年間一緒に暮らした俺が断言す

る。

壁の方を向いて肘枕した俺は、たのしそうなレイジにイヤミのひとつでも言いたい気分になって口を開く。

「手紙にこもってるのは愛だけかよ」

「？」

「憎しみもこもってるんじゃないか」

一呼吸の沈黙。

「否定はしない。実際剃刀入りの手紙送りつけてくるようなあぶねー奴もいるしな」

振り返る。肩越しに見たレイジは俺と同じような格好でベッドに寝転がり、頭上に手紙をかざして読み耽っていた。安物の便箋に綴られた字をすばやく目で追いながら結論づける。

「でも、いいもんだぜ。こうやって何度も読み返せるし手元にとっておけるし、娑婆の女が俺のことを忘れてないんだって確認できる」

「お前馬鹿か、他に男つくってるにきまつてるじゃないか」

「浮気はいいよべつに、おれも浮気するし」

さらに世の女に刺されそうな発言をして手紙をたたみ、こちらに顔を振り向け、意味ありげに笑う。

「お前の浮気は許せないけど」

「ちょっと待て、俺がいつお前のものになった？」

たしかに何度も寝込みを襲われかけたが、まだ既成事実はない、はずだ。

脅すような笑みを浮かべたレイジに確信が揺らぐ。俺がぐすり寝込んでて気付かなかっただけ、というおぞましいオチはないよな。さすがにそこまで鈍感じゃないぞ俺。畳んだ手紙を封筒に戻し、ベッドの下に放りこんだレイジがベッドを立て大きく伸びをする。

「いい加減読み返すのも飽きたな」

「安心しろ、もうすぐ青い鳥がまいこんでくる」

反動をつけて上体を起こし、ベッドに腰掛けた姿勢で鉄扉を注視する。廊下を近づいてくる尖った靴音。カツンカツンカツン……房の前で靴音が止む。

「レイジはいるか」

「はい」

ふざけた返事だ。もしレイジ以外のやつがこんな返事をすれば前歯の一本や二本は折られてただろう。鉄扉が乱暴に開けられ、見るからに横暴そうな面構えの看守が現れる。

「お待ちかねの手紙がきてるぞ。視聴覚ホールに集合だ」  
横柄に顎をしゃくって看守がひっこむ。ついてこいという意思表示だろう。看守の背中を追って房をでていきかけたレイジが鉄扉のノブに手をかけて振り返る。

「んじゃ、いつてくる」

「もう帰ってこなくていいぜ」

「俺がいない間に浮気すんなよ」

聞いちやいねえ。

馬耳東風のレイジが踊るような足取りで房をでてゆくのを見送り、手持ち無沙汰な気分で床を見つめる。鈍い音をたてて鉄扉が閉じ、いつ聞いても音痴なレイジの鼻歌が廊下を遠ざかってゆく。廊下の途中で「しずかにしろ！」と看守に怒鳴られ一瞬だけ鼻歌が止むが懲りない様子ですぐに再開される。今度は看守も注意しなかった、背後を歩いているガキが泣く子もびびる東棟の王様だと思いついたのだから。

鼻歌が遠ざかり、やがて聞こえなくなる。

レイジがいなくなり、奇妙なほど広々と感じられる殺風景な房にひとり残された俺はなにげなく向かいのベッドの下に視線をもぐらせる。

うらやましくなんかない。

たかが手紙だ。読み終わったら鼻をかむかケツを拭くかし  
かとりえのねえ薄っぺらい紙じゃねえか。

通常強制労働は朝6時から夜6時までの12時間と決まっているが、この日だけは特別。

強制労働は午後3時で切り上げられ囚人たちはバスに鑑詰

めにされてそれぞれの部署から戻ってくる。そこから先の進路は二通りに別れる。房に戻るか中庭にでるか廊下をぶらつくかして暇を潰す奴らと看守によばれて中央棟の視聴覚ホールに出張する奴ら。

東京ブリズンの地理について説明しよう。

東京砂漠のど真ん中に建つこの刑務所は奇奇怪怪にこみいった構造をしている。まるで迷路だ。核をなすのは東西南北に配置された四つの棟でそれぞれ東棟・西棟・北棟・南棟という面白みのないネーミングで呼ばれてる。過去、それぞれの棟は渡り廊下でつながれていたが俺がここに入った時にはすでに渡り廊下は封鎖されて棟同士の行き来はできなくなっていた。

べつにコンクリートで塗り固められてるわけじゃないが、有刺鉄線のバリケードが二重三重に張られているため手の皮がやぶけるのを承知でバリケードを乗り越えないかぎり渡り廊下から隣の棟には行けないわけだ。

なんで渡り廊下には有刺鉄線なんて物騒なものも張られてるのか最初は疑問だったがすぐに謎は解けた。

「棟同士の抗争だよ」

入所して間もない俺が渡り廊下が封鎖された理由を訊ねたら、レイジはこともなげにそう言った。

「東京ブリズン創立当時から棟同士の仲が悪かったのは聞

いてるだろ。隣り合った棟は殆ど戦争状態でその激戦区になったのが渡り廊下だ。渡り廊下じゃ毎日のように対立する棟同士の小競り合いが繰り広げられてどうかすると二桁の死傷者がでることもあった。だから『上』の人間は手を打ったわけだ、渡り廊下を封鎖して行き来を禁止しちまえば流血騒ぎもおきねえだろうって」

そんなわけだ。

実際それは名案だった。俺たち囚人はまず自分の棟からでることはないし渡り廊下がふさがれても殆ど不便は感じなかった。

でも、封鎖された渡り廊下とはべつにもうひとつの渡り廊下がある。東西南北どの棟からも等距離にそびえる中央棟へと通じる渡り廊下で、こっちは今でも頻繁に使われている。中央棟には図書室と視聴覚ホールと医務室がある。刑務所に入ってから読書に目覚めた囚人や怪我をした囚人はこの渡り廊下を通って中央棟に行く。棟同士が直接つながる渡り廊下では火種が絶えなかったが、中央棟ではその心配もない。看守が常駐してる図書室で喧嘩をおっぱじめるような馬鹿な囚人はさすがに東京ブリズンにもいない。

軽い見かけに反して読書家のレイジは三日と空けずに図書室に通っているが、俺は図書室に足を運ぶことはあまりない。医務室に行く頻度はもっと減る、ここじゃ大概の怪我

は「唾つけときや治る」程度のかすり傷と見なされるのだ。残るひとつ、視聴覚ホールは特別なイベントの時だけ開放される。くそつまんねえ映画の鑑賞会や新入りの配属先一覧表公開。

そして、三ヶ月に一度の今日この日だけ。

最もすべての囚人にお呼びがかかるわけじゃない。現にレイジは呼ばれて俺は呼ばれなかった。くそ。

房をでたときから空気が浮いているのがわかった。

廊下にたむろった囚人が変にそわそわとしている。落ち着きがねえ。ズボンのポケットに手をつつこんで憤然と歩き出す。すれ違う囚人の表情は二種類、不機嫌そうな仏頂面とほくほくと幸せそうな笑顔。前者の囚人は異常にびりびりして、肩が触れた触れないのささいないざこざが殴り合いの喧嘩に発展してる。ほくほくと幸せそうなツラの囚人はその反対、すれ違ったときおもいきり肩がぶつかるうが故意に肩をぶつけられようが「ああ、わりいわりい」と愛想よく返している。

嬉しそうなツラをした囚人の手には決まって手紙が握られていた。多い奴で十通、少ない奴は一通、平均して二・三通。手紙を持った囚人は中央棟の方角から流れてくる。その流れに逆らうように早足で歩き、階段をおり、踊り場で

立ち止まる。踊り場の窓をのりこえ、ひよいと外にでる。墜落の心配はない。外にはちゃんと固い地面がある……が、ここは一階じゃない。位置的には三階と二階の中間にあたるのだろうか。2・5階の踊り場の窓にはガラスが嵌まってる。窓の下は床は長年風雨にさらされつづけて変色している。暴れて頭から突っ込んだ囚人がガラスをぶち破って以降この状態で放置されているのだ。東京ブリズンに何百何千と存在する抜け道・裏道のひとつだ、別段目新しくもなんともない。東棟の囚人で知らない奴のが少ないだろう。

2・5階の踊り場の外にはコンクリートの展望台がある。展望台つてのは俺たちが勝手に呼んでるだけで実態は下層階の壁の出っ張りだ。収容人数の増加に伴う下層階の拡張工事のせいで二階より下の壁は出っ張ってて、つまりはその出っ張りが2・5階の踊り場と接してるわけだ。まったく変な造りの刑務所だ、九龍城かよ。

通称展望台とよばれるコンクリートの突堤の向こうには広さだけは十分な中庭が広がってる。見晴らしはいい、バスケットボールを追っかけて走り回ってる囚人どもを一望するには絶好のポイントだ。それに2・5階の高さがあれば多少は風も感じられる、涼むにはもってこいだ。

展望台にはすでに先客がいた。おれとおなじく視聴覚ホー



ルにお呼びがかからなかった奴らだろう。無然とした面だまりこみ、お互い距離をとって展望台に散ったガキどもの間を突っ切ってコンクリートの先端をめざす。もちろん囚人が立ち入ることを想定してなかったわけだから手摺なんてご大層なものはない。展望台の先端はそのまま垂直に切り立っている。

コンクリートの絶壁。

絶壁の縁に腰かけ、宙に足をたらす。ポケットに手をやり、煙草をくわえる。この前廊下に落ちてた煙草だ。しけてないしまだ吸える、はずだ。煙草は味もろくにわかんないガキのころに吸ったきりだ。いつもはべつに吸いたいともおもわないが、気分がむしやくしやした時には無性にニコチンが恋しくなる。惜しむべくはここにライターがないことだが……

指の間に煙草をはさんでため息をつく。せつかく持つてても吸えないんじゃない宝の持ち腐れだ。レイジが房を出る前にライターを持つてるかどうかに聞いとくべきだった、東棟の王様はなんでも持つてるしな。

口寂しいから火のついてない煙草を口に挟み、後ろ手をついて空を仰ぐ。砂漠はいつもいい天気だ。だだっ広く、はてしがない。この砂漠の遥か彼方に俺の産まれた池袋があった俺を産んだおふくろがいて……

「ここは禁煙だぞ」

俺の感傷をぶち壊したのはクールな声。

後ろ手をついたまま振り向くと背後に鍵屋崎が立っていた。小脇に本を抱えてるところから察するに静かに読書できる場所をさがして展望台にまでやってきたのだろう。

「図書室に行きやいいだろ」

「騒がしくて落ち着かない」

たしかに。図書室で行儀よくできない連中はガキ以下だが、この囚人はそんな奴ばかりだ。……ちよつと待て。

「房に帰れよ」

「……………」

本を借りてきたんなら自分の房でゆっくり読めばいい、なにも展望台にくることはない。

「なにか房に帰りたくない理由でもあんのかよ。サムライと喧嘩したとか」

「変に勘繰らないでくれ、僕が房に帰りたくないのは『奴』がでたからだ」

「やつ？」

口から煙草を外し、鍵屋崎を仰ぐ。無言のまま俺の隣に腰掛けて本の表紙を開き、鍵屋崎が言う。

「クロゴキブリ 学名 *Periplaneta fuliginosa* ゴキブリ科  
分布…全国 体長…30〜35mm 特徴…本州では最も代表的

な家屋性害虫種。ただし、南方ではコワモンゴキブリやトビロゴキブリ等の方が優勢らしい。若齢幼体時は黒い体色で、中胸部全体や触覚の先端が白く、腹部にも一對の白い斑紋がある。成長とともに赤褐色になり、白い部分は目立たなくなる。成虫は全身黒褐色。いうまでもなく雑食性」

「ゴキブリか」

納得。ここにきてずいぶん経つ俺はいまさら房にゴキブリがでたくらいじゃ驚かないが、まだ二ヶ月しかたつてない鍵屋崎は慣れないだろう。潔癖症だしなコイツ。

「ゴキブリ怖さに逃げ出してきたわけか。ご愁傷様」

気のない声でイヤミを言った俺にはまるで注意を払わずベージュをめくる。相変わらず無愛想な奴だな、会話が成立しねーじゃんか。あきれながら鍵屋崎の右手薬指に目をやる。腫れはだいぶひいていた。読みやすいよう本を支えることができるくらいだからもう殆ど日常生活に支障はないだろう。つまらなそうに本の活字を追ってる鍵屋崎の横顔をちらりと眺め、コイツが隣にきたときから気になってたことに探りをいれる。

「お前にはきてねーの、手紙」

「だれからだ」

「家族とかよ」

友人はないだろう。絶対。

「答える義務がない」

本から顔をあげた鍵屋崎が迷惑そうに俺を見て吐き捨てる。

「きてないんだな」

「黙秘権を行使する」

「俺もきてねーよ」

「だからどうした？」

「どうもしねえけどさ」

パタン。

拍手を打つように本を閉じ、くるりと俺の方に向き直る。

眼鏡越しの双眸に

「仮に君とおなじように身内からの手紙が一通も届いてないからといって、それがどうだというんだ。きみだつて自分がどうしてここにいるか忘れたわけじゃあるまい、僕らは懲役刑に処された犯罪者なんだぞ。きみの場合被害者の遺族から糾弾の手紙が届くことはあっても身内からいたわりの手紙が届くわけがないじゃないか。もちろん僕もそうだ、僕の場合被害者は両親だから遺族からの抗議文イコール身内からの手紙になるわけだがそれもない、一通もない。だからなんだ？ それがどうした？ それだけの接点で妙な親近感を抱いて馴れ馴れしく口をきかないでくれ、気色が悪い」

「これ以上読書の邪魔をするな」といわんばかりの刺々し

い口調だった。一緒にムショ入りしたダチが死んでから性格まるくなったと思つてたけど前言撤回、全然変わつてねえ。どころか、ますますひねくれてるじゃねーか。

はげしい徒労感に襲われてため息をついた俺は、指の間に預けた煙草をふたたび口にもつていきかけ、鍵屋崎に睨まれる。

「同じことを二度繰り返させる気か？」

「禁煙なんてだれが決めたよ」

「僕だ。副流煙は体に毒だ、肺がん発生率が上がる」

「ほんとに自分のことしか考えてないんだなお前。てか、そんなにいやなら俺の隣にくるなよ。どっか他いけよ」

「断る」

「なんで」

「ここがいちばん日当たりがいい。本を読むのにちょうどいい角度で陽射しがあたるんだ」

議論を続ける気力が尽きた。鍵屋崎は頑固だ、自分の主張を譲る気はこれっぽっちもないらしい。指に煙草を挟んだまま、ほかにやることもなく空を見上げる。

快晴の空。雲ひとつない青――

「サムライはどうしてる」

「房にいるんじゃないか」

「アイツも手紙きてねーの？」

「そうらしいな」

「ふうん」

サムライは俺がくる前からここにいる。レイジと同じかそれ以上の古株に入るだろう。長年服役してる囚人には手紙もばたりと絶えて届かないというのがサムライもそのクチだろう。最もサムライの場合、鍵屋崎とおなじで親を殺してるから娑婆の身内からの心あたたまる手紙がなくてもむりはない。

話のタネも尽きた。鍵屋崎は読書に集中してる。暇をもてあました俺が大口あけてあくびしかけたその時だ。

「ん？」

中庭の一隅に目を凝らす。

中庭の端っこで仲間を集めてなにやら話しこんでるのは凱だ。なにかと俺を目の敵にしてつかつかってくる面倒くさい囚人。自分の顔の前に取り巻き連中を招き寄せ、手にした手紙をいそいそと開き、俺が見たこともないようなデレデレしたツラで何かを喋っている。

「女か？ まさかな」

「なんだ？」

「あれ」

顎をしゃくる。凱を発見した鍵屋崎の顔がそれこそゴキブリを踏んづけたようにしかめられる。視線の先には満面笑

顔の凱。

「気味が悪い」

「だろ」

「凱には手紙がきたんだな」

「らしいな」

なんとなく顔を見合わせる。気まずい沈黙。

鍵屋崎は軽く咳払いしてページをめくり、俺もそつぽを向く。

互いの目を見ただけで言いたいことがよくわかったからだ。意識。

凱のような最低野郎にさえ娑婆からの手紙が届いたというのは、俺たちに手紙がこないのはいくら自業自得とはいえ自尊心の危機。

調子つ外れの鼻歌が聞こえてきた。

「大漁大漁つと」

踊り場の窓を乗り越えて歩いてきたレイジに所在なげに展望台に散っていた囚人たちから嫉妬と羨望の入り混じった視線が注がれる。両腕いっぱい抱えているのは手紙の束だ。

「ロン、こんなとこにいたのか。さがしちまったじゃねーか」

「大漁だな」

にやけ面のレイジにイヤミっぽく言ってる。両手に抱えた手紙の山を見下ろしたレイジはまんざらでもなさそうに笑う。

「それでも昔に比べて倍近く減ったんだぜ」

レイジの手の中に目をやる。手紙は全部で二十通、この倍近く届いていたということは四十通か？ 展望台のコンクリートに胡座をかき、どさりと手紙を投げ落として一通ずつ目を通してゆく。

「スヨン、杏奈、シェリファ、メアリー、麗羅、ソーニャ、テレサ……」

長ったらしい呪文のようにブツブツと女の名前を唱えながら右から左へと手紙を移し変えて小山を築いてゆくレイジは一瞥もせず、つまらなそうな無表情で本に読み耽る鍵屋崎。興味ないふりを装っているが、苛立たしげにページをめくる手つきから奴が酷くぴりぴりしていることがわかった。最後の一通を頂点にのせる。手紙の小山を築き終えたレイジは「よつしや」と腕まくりし、娯娯として開封作業にとりかかる。手紙の山の中腹からランダムにとりだした封筒を日に翳して差出人名を確かめ、いそいそと封を破く。

「くさい」

おもわず鼻をつまむ。レイジが広げた便箋からすえた香辛

料の刺激臭のようななんともいえない匂いが漂ってきた。

「ばか、香だよ。インドの」

どうやら便箋に香が焚き染められていたらしい。顔の前に漂ってきた異臭を手で払いながら好奇心にかられてレイジの手元を覗きこむ。膝這いに這ってレイジへと近寄った俺の目にとびこんできたのは便箋上のミミズの行進。

「……何語だ？」

毒を呷ったミミズが七転八倒してるようにしか見えない外国語は俺にはさっぱり理解できない。便箋の文面に目を走らせながらレイジが言う。

「ヒンドウー語」

……男でも女でもとつかえひつかえ手当たり構わずの節操なしだとは知っていたが、人種はおろか国にもこだわらないなんて。レイジはある意味究極の平等主義者かもしれない、レイジの中にはそもそも国境線が存在しないのだ。次から次へと手当たり次第に便箋を広げてはとつかえひつかえ目を通してゆくレイジのにやけ面が無性に腹立たしくなつて舌打ちしながら鍵屋崎の隣に戻る。ガサガサと手紙を広げる音が背後で聞こえる。レイジがうらやましいわけじゃない、そんなことはない絶対に。最初から期待してなかったから落ちこむ理由もない。だいたいこんな極東の刑務所宛に、俺宛の手紙が舞いこむわけがないのだ。

お袋とはとうに縁を切った。親でもなけりや子でもない。だから別に……

「落ち込んでんのか」

背後で声。

「落ち込んでねえよ」

膝這いに這って俺の顔を覗きこんだレイジが一瞬逡巡するような表情を見せてから、俺の顔の前に一通の手紙を突き出す。

「やるよ」

「……は？」

馬鹿かコイツ。

「お前宛の手紙くれたも嬉しくねーんだけど」

「たくさんきたからお裾分けだ」

真性の馬鹿だコイツ。

それとも天然で残酷か天然でお人よしのだろうか、寛容で博愛精神あふれる偉大な王様の発言に俺は口を噤んで一寸迷うそぶりを見せてからおおずおおずと手紙を受け取る。そして、満足そうに微笑したレイジと手紙とを見比べて早速行動にでる。封筒から薄い便箋をとりだしてコンクリートの地面に広げ、丁寧にしごいて折り目をのばす。何のつもりだと怪訝な顔のレイジをよそに便箋をさっさと折りたたんで紙飛行機を作る。

俺は天性の不器用だから出来はお世辞にも素晴らしいとはいえないが、まあいいだろう。

完成した飛行機を角度を変えてためつすがめつしてから、ひよいと手首を撓らせる。俺が飛ばした紙飛行機は上手いこと風に乗リ、ツバメのようにあぎやかに滑空した。

「なんてことすんだよ!？」

俺の奇行をあぜんと見守っていたレイジがこれ以上なく情けない顔で訴えるが、無視して飛行機の行方を追う。小手をかざした俺の視線の先、不恰好な紙飛行機はよれよれと不安定な軌道を描いて遂に力尽き中庭に墜落。バスケットボールを追って駆けずり回っていたガキどもに踏まれ、揉みくちやにされ、泥だらけになる。

「飛距離30メートルというところだな」

本から顔を上げた鍵屋崎が一言呟き、すぐにまた本に目を戻す。意外と飛んだな。上々な成果に気をよくした俺の隣ではレイジがコンクリートに手をついて大袈裟に嘆いていてた。

「ひどい、ひどすぎる、親切を仇で返しやがつて……娑婆の愛人のシェリファが真心こめた手紙なのにつ」

恋人じゃなくて愛人ときたか。レイジらしい。

「一枚くらいケチケチすんな、沢山余ってるだろうが」

俺を哀れんで分けてくれるくらいだからもともとから執着は薄

かったのだろう。案の定レイジの立ち直りは早かった。ため息をついて胡座をかけたレイジは手紙の山を両手に抱え直すと今初めて気付いたように鍵屋崎に目をやる。

「キーストアには手紙きたの?」

「来たのならこんなところじゃない」

にべもない返答だ。

眼鏡越しの目を伏せて即答した鍵屋崎を「ふくん」と眺め、両腕に手紙を抱えたレイジが何か言いかけたときだ。

「やつほ、みんな集まってるね」

澄んだボーイソプラノに揃って振り向く。

今しも窓枠を越えて展望台に降り立ったのは燃えるような赤毛のガキ。鼻梁にそばかすが散った童顔にあどけない笑みを湛え、俺らの方に気安く手を振ったのは男娼のリヨウ。ここにこ笑いながらスキップするように近づいてきたリヨウの後ろ、窓枠を跨いで姿を見せたのはリヨウと同房の黒人だ。名前は忘れたが、レイジと仲がいいからツラは知ってる。

人懐こく笑いながら俺の隣に腰掛けたリヨウが手にしていたのは一通の手紙。よっぽど大事な人から届いた手紙らしく、もう一通、無造作に尻ポケットに突っ込まれてる手紙とは扱いからして違う。尻ポケットの手紙のほうが白い上質紙の封筒で高級感あふれてるのに。

「ようビバリー、その節は世話になったな」

「いえいえ。またテキーラが必要になったらいつでも言うてくださいっす、王様と仲良くしといて損はないっすからね」

ビバリーと呼ばれたガキと和氣藹々と会話してるレイジ、その言葉の何かがひっかかる。

「飲みたくなったら、じゃなくても必要になったら？」

囚人が酒を隠してるのはいまさら不思議に思わない。要領のいい囚人の中には看守に取り入って酒や煙草やガムなんかの禁制品をゲットする奴もいるし、博打が強い囚人の中には看守と賭けをして戦利品をぶんどるのを生き甲斐にしてる奴もいる。ビバリーは愛想もいいし世辞も上手いし看守受けは悪くなさそう。テキーラを手に入れる機会はいくらでもあったわけだ。

だからその点に関しては疑問は抱かなかったが妙な言い回しが気になった俺に、レイジが意味ありげに微笑する。

「また火炎瓶が必要になったら、な」

すとな臍に落ちた。

「ガキの頃よく火炎瓶作って遊んだな。テキーラを瓶に入れて火をつけて投げる遊び」

「レイジさんどんな子供時代すごしたんすか」

火炎瓶にテキーラを流しこむ動作をしながら昔なつかしむ

レイジにあきれ顔のビバリーが一同を代表してツツコミをいれる。俺もチームにいた頃は火炎瓶のひとつやふたつ自前で用意したが、ガキの頃からそんな物騒なもんを持ち歩いたりしなかった。

「で？ お前は手紙もらえたのか」

回想から覚めたレイジにビバリーが腕を広げる。手ぶらの証明。

「仕方ないっすよ。ほら、僕のアミリーってビバリーヒルズ在住じゃないスか。届くまで時差があるんすよ、エアメールだし」

残念そうに主張したビバリーから俺の隣に腰掛けたリョウへと視線を転じるレイジ。

「お前は？」

「じゃーん」

待ってましたといわんばかりに顔の横に手紙を掲げる。得意満面、胸を反らしたりリョウの右手に鍵屋崎を除く全員の視線が集中する。

「ママからだよ」

ママ。

舌の上で砂糖菓子がとけるような発音。

「そっちは？」

「ああ、パトロンの親父から」

顎をしゃくつたレイジに凄まじい温度差のある声で答え、興味なさそうに尻ポケットを一瞥する。くるりと前を向いたリヨウは母親から届いた手紙のことしか眼中になかった。「視聴覚ホールから戻ってくるまでの間にもう何回も読み返しちゃった。ママってば相変わらずだ、元気にしてるみたいで良かったけど相変わらず男にだまされて泣いてばかりいるらしい。やつぱりリヨウちゃんがいなきゃだめだって、僕がいないと寂しくて死んじやいそうだって、はやく戻ってきてほしいって……まったく、どっちが子供だかわかりやしないよ」

「参ったなあ」と弱りきつて頭を掻いているが俺には愚痴を気取った惚気にしか聞こえなかった。事実、いとおしげに親からの手紙を見つめるリヨウの顔は見てるこつちが憎らしくなるくらい幸せそうに笑み崩れている。どうやって人を出し抜こうかと企んでるいつもの笑顔ではない、素の笑顔。

「でね、ママってば僕がここに入ってから三人目の男ができたみたいなんだけぞいつとうまういなくて家出中なんだって。この手紙はホテルで書いたらしい。もうすぐ持ち金が底を尽くから早いとこホテルをでてかなきゃって悩んでるけど行くあてあるのかなあ、ママ美人だから変な虫にひっつかって場末の売春窟にでも売り飛ばされたらどう

し」

「うるさい」

饒舌にまくし立てていたリヨウをさえぎった鍵屋崎に全員の見線が集中する。それまで我関せずと本を読み耽っていた鍵屋崎がボタンと表紙を閉じ、本を膝においてからキツと向き直る。眼鏡越しのきつい眼差し。

「読書中なんだ、私語は慎んでくれないか」

「ああ、いたんだメガネくん」

最初から気付いていたくせに、今鍵屋崎が目に入ったといわんばかりの大仰さでリヨウが驚く。神経質そうに眼鏡のブリッジを押し上げて顔を伏せた鍵屋崎をじろじろ眺め、高慢ちきに腕組みしてリヨウがうそぶく。

「メガネくんは手紙きたの？」

「……………いや」

「ふうん」

「なんだ、言いたいこともあるのか」

「べつにー。ただ、だから手紙がこないなんて可哀相だなあって」

「きみに同情される筋合いはない。それにリヨウ、きみこそ自分のおかれた立場を忘れてないか？ ぼく達は服役中の犯罪者で身内の恥さらしだ、そんな人間に好き好んで手紙を書くような手合いはよほどの偽善者で自己本位な奉仕



精神に酔いしれてるとしか思えない」

リヨウの顔色が変わる。そりやそうだろう、世界でいちばん大好きな母親を「自己本位な奉仕精神に酔いしれた偽善者」よばわりされたんじゃないや頭にくるのも頷ける。

「ほんとは嫉妬してるんでしょ」

「嫉妬？」

理解できないというふうに眉をひそめた鍵屋崎を見下ろし、手紙で風を送りながらリヨウが続ける。

「僕にはちゃんと手紙がきた。君にはきてない。ママはぼくのことを忘れてない、今でもぼくが大事だからこうして欠かさず手紙をくれる。君はどう？ だからから大事に思われてないから、出てくるのを待ち望まれてないから一通も手紙がこないんでしょ」

リヨウの言葉が胸に突き刺さる。

確かにそれはそのとおりで、俺に一通も手紙がとどかないのは娑婆の人間は俺のことなんかとつくに忘れ去って普通に暮らしてるからだろう。お袋だつてそうだ、いや、お袋こそいい例だ。自分が腹を痛めて産んだガキの存在なんか綺麗さっぱり忘れ去って今頃は新しい男をくわえこんでるにちがいない。

俺も鍵屋崎も、娑婆の連中にとっては一日も早く記憶から消し去りたい存在なのだ。

「可哀相だね、ホント」

リヨウが首を振る。

「きみの大事な妹さんは大好きなお兄ちゃんに手紙ひとつくれないわけ？ 兄妹仲はよかったんでしょ。刑務所にとじこめられてひとりぼっちのお兄ちゃんのことを心配じゃないのかなー妹さんは。冷たいねー。まあ仕方ないよね、きみつてば両親殺しちゃったんだし。それつてつまり妹さんのパパとママも殺しちゃったわけでしょ、ぐさつと。つまりきみは妹さんにとつてただひとりのお兄ちゃんであると同時にパパとママを殺した憎い仇でもあるわけだ、うん、なら仕方ないね手紙がなくても」

「おい、そのへんに……」

ねちねちと陰險なイヤミを聞くに耐えきれずに腰を上げかけた俺を制したのは鍵屋崎。ずんずんと自分に歩み寄る鍵屋崎を見据えるリヨウの目には露骨な優越感がある。

「こうも考えられる。パパとママが死んでおにいちやんは刑務所にいれられて、ひとりぼっちになった妹さんは首を吊つて……」

「リヨウさん!!」

調子に乗りすぎたリヨウが言つてはならないことを口走りビバリーが止めに入ったが、鍵屋崎が手紙を奪い取るほうが早かった。

リヨウの手から強引に手紙を奪い取った鍵屋崎がコンクリートの突堤に立ち、胸の前に手紙を翳す。

「！ なにす、」

狼狽しきつたりヨウの叫びを無視し、鍵屋崎が手紙を引き裂く。

一度ではない。

二度、三度、四度、五度。原形を留めない断片にまで千切り捨てた手紙を両腕からこぼし、抜けるような青空の下にばらまく。

青い空に舞う幾千の白い紙片。

鮮烈なコントラストをさらに印象付けたのは、コンクリートの先端にたたずむ鍵屋崎の背中。孤独が人の形をとったような背中のように降り注ぐのは、折から吹いた風にさらわれ、吹雪のように儚く淡く積もりゆく千々に裂かれた手紙の切れ端。

中庭に散らばっていた囚人たちがてのひらで紙片を受け、「何だ？」「何だ？」と顔をあげる。その目に映った光景が俺にはありありと想像できる。

展望台のへりに立ち尽くし、陽射しに反射したレンズの下に表情を押し隠し、紙吹雪にさえぎられた鍵屋崎の姿。

紙吹雪を演出した当の本人は落ち着き払ったしぐさでシャツに付着した紙片を払い落とすと何事もなかったように読書に戻った。妙にすつきりした顔でしおり紐をはさんだページをひらき、次のページをめくろうとした――

その時だ、リヨウが鍵屋崎にとびかかったのは。